
笑い日和。

大野さいころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い日和。

【NZコード】

N1856BA

【作者名】

大野さいじろ

【あらすじ】

剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり馴妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。たまにショートストーリーも投稿します。投稿は不定期です。

#1 こつもの風景（前書き）

はじめまして。大野さーーと申します。
到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷つかも知れ
ませんが、
どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

#1 いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかつた。

ここは2・B、つまり俺 大藤功^{こう}がつい先日、四月の頭からいるクラス。

そういえば授業中だつたつけ？

まあ少しうとうとしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。

静かすぎるのだ。

いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。このクラスに限つては静かすぎるることは異常なのだ。

普段はあまり真面目な生徒がいないのか「onsoonso」話したり「onsoonso」何かしている音がするのがこのクラス。

授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があつたわけでも、皆が急に真面目になつたわけでももちろんないだろ？
俺が一人疑問に思つていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵^{めぐみ}。クラスメイトであり、俺の親友でもある女子。

恵とは去年知り合い、どうしてだつたかわからないが意気投合して

仲良くなり現在にいたる。

現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるの
でいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、こつもないうある。

「痛いわー！」

授業中とこいつことを忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。
いつもなら恵はしまって小突いてくるのに今日は思いつきつ出来る
ようだ。

背中にチクつとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じゃ
なく全般的にチクチクしてるんだけど…
とこいつか、背中に刺さったってことか…

「ワイヤーシャツ貫通してるじゃねーか！－恵、なんで今日は恵に

しまつてないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「（前ー前ー）」

ヒジHスチャー付きロゴばくで伝えてきた。

なんだろう？？と思いつ、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなこと
を考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててゐるし。
後ろで恵が「思ったこと口に出しからつてゐるし……」とか言つてゐるが
何の事だかわからぬ。

このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。
文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。
ちなみに中身も体育会系。

怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。
ちなみに顔も怖い。

ここまで考えて めちゃくちゃ失礼なことを やつと理解した。
このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。
そこまでわかつて嫌な汗がだらだら出てきた……。

そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さこ……」

おもいっきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどこのいつの言
つてられない。

しかし後ろのほうで笑つてゐやつはひやんとあとで制裁しよつ。俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと想つてゐるんだ！」

「えつと…。やせじい国語教師だと想つてゐます」

「セツモンスターつて書つておいて、よくそんなことが聞えるなー！」

「心を読まれていた！？」

「口に出して言つてたわ！…まあいい。何か言い訳とかはあるか？一応あるなら聞いてやるわ。」「

「なぜ体育の教師にならなかつたんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立つてる…」

笑い声が聞こえる中、すうすうと廊下に出ていく俺。

廊下に立つてゐだけにどんな意味があるのかを誰かに聞きたかつたが、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかつた。

ただ立つてゐるだけの、暇な間少し考える。

俺が通つてゐるこの学園は『私立国際学園高等部』。

国際とつくだけあって、一年生のクラスには毎年五月の中頃から留学生が来る。

どのクラスに来るのかはわからないが、面白いやつだとうれしい。ちなみにクラスは2・B。A～Eまでクラスがあり、一クラス40人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。

ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。

きっと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろ？

高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあつたので、中学からの顔見知りもかなり多い。

もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。

ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。

しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。

というのも、不良がいないからだ。

不真面目な生徒はいるが、不良はいない。

ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。

そんな環境を俺はかなり気に入っている。

荒波立てず、平穀でそれなりに楽しい生活ができる今を大切にしたいと思つてゐる。

これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。

授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。俺はさつそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。

モンスターに追い出され、教卓側のドアから入るうとすればモンス

ターに会つのは必然だつた。

しかし、さつきまで悦に入つて自分の考えに浸つていたのですつかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過ぐやうか。反省文ならおひつてやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「は……」

強制だつた。笑顔が不気味すぎて怖かつた。

こうして俺は昼休みを失つてまでモンスターと過ぐすことになつてしまつた。

教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

「肉じゃが」（前書き）

本編とはまったく関係ないです。

あらすじにショートストーリーもあり、と書きましたがこれがそうです。

以後も今回と同じように、サブタイトルに関連する話をショートストーリーとして

投稿するつもりです。

ちなみになぜ肉じゃがかと言いますと、作者が実際に知人と肉じゃがについて

話していたからです。毎回ショートストーリーのサブタイトルはこんな感じで

決まりますので、深い意味などはないのであしからず。

何度も言いますが、本編とはまったく関係ありません。

「肉じゃが」

功「恵よ。肉じゃがの『じやが』って何か知っているか?」

恵「じゃがいもの」とでしょ?」

功「そうだ」

恵「なんかす」「こ偉い!」しゃべるね?」

功「意味はまったくないがな」

恵「じゃあやめよう?」

功「あれ、恵には不評だったか?」

恵「うん、なんかイリッとした」

功「そ、わつか…。笑顔がなんか怖いんだが…」

恵「そんなことないよ。っていうか、すでに誰かに試したの?」

功「ああ、美香にな。あいつはす」「喜んでくれたんだけどなー」

恵「あー美香ちゃんにか。なるほどねー」

功「なにがなるほどなんだ?」

恵「美香ちゃんだから、功くんのやる」となす」となんで

も嬉しいんだよ」

功「やさがにそれはないと思つたびだな。さびよくなつたから喜ばれつてのも確かにおかしいな」

恵「でしょ？まあそれはいとしつれー」

功「うん？」

恵「結局なんだつたのかなーと思つて」

功「？？」

恵「そんな本氣でわからなつて顔されても困るんだが」

功「ああーなんであんな偉そうにしてついたのかつて」とか？」

恵「違つよー肉じゃがの話ー。」

功「ああ…そんな話もあつたな」

恵「なんでそんな昔の」とのよひ…」

功「いやーわづきの恵の顔が般若みたい」

恵「二二二」

功「なんでこことさなくただ俺がどまれつただけでした？」あんなさい！」

恵「もう。で、肉じゃがの話は結局なんだつたの？」

功「あーうん。今日食べたいなあと思つただけなんだけど」

恵「それだけ！？」

功「恵よ。肉じゃがが食べたいぞ」

恵「もうここまでのキャラは……」

功「ふふふ。ふははははははは……」

恵「……」

功「クレープはいかがですか、姫様」

恵「態度変わりすぎだよーそんな怯えなくとも……」

功「冗談だよ。すいません、イチゴクリーム味のクレープ一つください」

恵「いいのー？」

功「今日だけな」

恵「ありがとーー！」

店員A「やつとこきましたね…」

店員B「ええ。クレープ屋の前で肉じゃがの話を始めた時はびっくりしたわ…」

店員A「しまじにはコントみたいこと始めちゃったしね…」

店員B「けどいつも仲よさやつなカップルだったわね…」

店員A「羨ましいわ…」

店員B「ホントにね…」

店員A&B「はあ…」

Jの曰、功と恵の何気ないやり取りで一人のクレープ屋店員が憂鬱にさせられたのだった。

「肉じゃが」（後書き）

結局肉じゃが関係なかつたとこいつオチでした。
もはやサブタイトルの意味がない気もしますが、あまり気にしない
でください。

「サンタクロース」（前書き）

本編がまだ進んでないのでキャラが一人しか使えないという不便極まりない状況です。

「サンタクロース」

功「サンタって無駄な労力を使ってると思わないか?」

恵「唐突に話しあしたねー」

功「まあ付き合つてくれよ」

恵「いいよー。で、一体サンタのどのくんが無駄だと思つの?」

功「まず服装かな。煙突よじ登つたりするにはあのものいりやいした服はよくないだろ」

恵「うーん確かに。けど動きやすい服装にした場合、煙突よじ登つたりしてるとこ見られたらそれはただの変質者に見えないかな?」

功「そうだな。けどその問題は簡単に解決できる」

恵「そななの?結構難しい問題に思えるけど」

功「サンタって子供に欲しいものを的確に『えるだろ?』つまり、それぞれの住所を特定できるすべを持つてることになる。だから郵送すればいいんだよ!そしたら誰にも姿は見られない!」

恵「なんでそんなに興奮してるの?」

功「むしろ現金書留でいいよ!現金なら自由度が高いし、万が一欲しいものが直前に代わっても対応できる!」

恵「それは夢がなさすぎるよーーー！」

功「しかもあいづはトナカイがいなければただのオッサンだしな！飛んでいるのはトナカイであつてあいづはそりに座つてるだけだから！感謝するよトナカイ！」

恵「だからどうしたのーー？サンタに恨みでもあるのーー？」

功「しかしなるほど。ここまで考えてわかつたけどあえて動きづらい服装をし、現金ではなく物を送り、トナカイを操り移動するのはすべて演出だったのか。まったく、サンタも中々粋なオヤジだな！」

恵「もうつこていけないよーー！」

#2 こつもの風景 2 (前書き)

閲覧じゅうもありがとうございます。

何話か書きためてはいるんですが、中々作品の中の一話が終わらなくて困っています。予定ではこの回で一日が終わるはずだったんですけど…。

楽しんでいただければ嬉しいです。

反省文も無事終わり、午後の授業も終わった放課後。何をするでもなく、帰るわけでもなく、何となく集まっている3人の影。

一人は俺、大藤功だ。

一人はこの中唯一の女子で親友の、伊藤恵。後ろの席で二コ二コして椅子を傾けて遊んでいる。

どうでもいいけどかなりあぶなっかしい。そして楽しいのかそれ？そして最後の一人、黒川悟は馬鹿代表だ。

「黒川悟は馬鹿」

「急に罵倒すんのやめてくれよーーー？」

「黒川悟はオタク」

「否定はしないけど改めて言わるとムカつくーーー！」

「黒川悟はブサイク」

「女子に言わるとマジで傷つくよーーーか伊藤も功に乗るなよーーー！」

「黒川悟は」

「もついいでしょーーー？ そんなに俺の心を傷つけて楽しいーーー？」

「「全然？」」「

「じゃあやめてよーなんで無駄にそんなことあんだよー?」

「『騒だから』」

「僕たちホントに友達なのかな…?」

「「…」」

「黙らないでよー…まつたく、功と伊藤がそろつと手に負えないよ。前だつて…」

悟は愚痴をこぼすよ。そもそも何か言い始めた。
こんなときの悟は中々戻つてこない。さすがにやりすぎたかな?
どうにも恵とこのと悪ノリしてしまつ傾向があるなーと皿分析していふと、

「皿はお疲れをまだつたねえ~」

と恵に『氣の抜けるよつた声』で話しかけられた。

「まつたくだ。それにしてもちつとも助けてくれなかつたな?」

少し責めるよつた眼をして言つてみる。

「だつて功くんつてば全然起きないんだもん」

全然氣にせず、そしてなぜか若干悲しそうな顔で言つてくる。
とこつか起ここやつとしてくれてたのか…。悪いことしたなあ。

「そつか。『めんな?お詫びに帰りになんか奢つてやるよ』

「ホントにー? ジャあジャあクレープとアイスとハンバーガーと」
「どんどん出てくる食べ物の名前。恵は小柄だがよく食べるのだ。
つーかその小さい体のビニにそんなに入るんだよ、と疑問に思われるを得ない。

「ポテトにジャコースでしょ? あとは」

「太るぞ?」

恵がさらに何か言おうとしたといいで、女子に効果抜群な言葉を浴びせる。

恵はよく食べるが、別に食べても太らないわけではないのだ。

「う、…」

言葉に詰まる恵。そして追い討ちをかける俺。

「だるまみたいになるぞ? セツカくかわいいのに」

「う、…え?」

「え?」

「あ、いや…つていうかだるまつてひどくないー!?」

「あ、ああ。なりたくなかったらどれか一個にしつけて」

恵の何かよくわからない勢いに若干押されつつも、自分の財布のた

めに提案する。

「うへ、わかつたよ。じゃあクレープ」

「りょーかい

「3個ね

「結局ーー?」

3個も食べるのーー?

予定外の出費が…。今月は結構金使う予定あるのに大丈夫かな…。
まあもう決まっちゃったので切り替えよつー。
あつとビックでこの分の金が戻ってくると信じてーー!

と、およそ現実的でない期待を抱いてると

「早くこーーよー。」

と急がされる。

食べ物が絡むと恵は子供っぽくなるなーと苦笑してると手を引っ張
られた。

「功くん、おいていくよー?」

「おいていく気ないじやん!」

めつちや力強いよー?簡単に引きずられてもよー?。

「い・い・か・らー」

「わかつたから引つ張んなつてー。」

自らも足を進めると、まだぼそぼそと向か言ってる悟が田に入った。
まさかあれからずつと?なんかちょっと怖いし。
まあおいてく氣もないので声をかける。

「悟、いくぞー。」

「だいたい功は中止から…って、え?どう?」

「だから、クレープ屋」

「こつまにそんな話にー?」

ちつとも聞いてなかつたのかよ。

「さつまの聞いてなかつたのか?悟のおいじりでクレープ食べるつて
話

「聞いてもなにして承もしてないのに決定してんかよー?」

悟は正当な抗議をしてくるが、とりあえず無視を決め込む。

「行くか」

「無視!?なんか今日冷たくないー?」

「うーん、なんか感じだと思ひながら…
しかしそくよく考えたらなんか可哀そうになつてきました。」

だつて俺からだけじゃなく、大抵の人は悟には似たような対応をするんだぜ？」

もしかしたらこいつは結構寂しい思いをしてるのかもしれないな…。俺は携帯を一回取り出し、少し操作して時間を確認し机に置いた。

「「めんな。今日からは俺だけは優しく接してやるから。そุดな、まずは一緒に登校するか？」

「急に何で！？」

唐突に言われた内容に悟は驚嘆していた。恵もなにがなんだかわからぬよつな顔をしている。

「功くん、なんで悟なんかに優しくするの？」

恵は相当地じごとを言つてゐるが、今はそんなことなどいでもいい。

「「こつはきつと優しさに飢えてると思つんだ」

「優しさ？」

恵は頭に？マークを浮かべてる。

しかし、俺が一瞬だけ目線を置いた携帯に移すと恵は「ふつ」と笑い、頷いた。

「俺らは悟に対して自然に冷たい態度を取つたりしてることに気づいたんだ。しかしこれからもそれが続くと語が耐えられるかどうかわからないじゃないか」

「え？ いや僕は別に……」

「もういいんだよ、悟」

俺は朗らかに笑いかける。

すると恵も俺に会わせて優しい口調で話しかける。

「そつか、そだね。今までごめんね？ これからはもう一回じつたり
冷たい態度とか取らないからね？」

「俺もだ。今まで氣づけなく『ごめんな』？ 他のみんなも同じで
おつかれ！」

俺と恵は今きつと爽やかな笑顔を悟に向かっているだろう。

拒む悟を恵と二人で置み掛ける。

「お前が心配なんだ、悟」

「もうだよ。今日からもう何も心配しないでね」

「だから……」

悟が大声で何か言おうとしている。

やつとか、と思い恵を見ると、すでにちよつと笑っていた。

「僕は優しくされたいわけじゃないから……むしろ功からは優し
くされるより冷たくされる方が嬉しいよ……」

悟の思いは教室中に響いた。

「さうと今ここは自分が言つたことをちゃんと理解していないだろう。

俺は携帯を手に取り、操作しながら話して言つた。

「わかったのか…。全然気が付けなくてごめんな?」

「わかつてくれればそれで」

いいんだ、とおそれいく悟がそう続けようとしたりで、ピッヒーう無機質な機械音が聞こえた。

俺の携帯から。

そして数秒後に先ほどの再現がなされた。

『むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ…』

恐ろしげくらいの静寂が教室を覆つた。

……。

「知らなかつたよ。お前、ホントに だつたんだな」

「今まで功くんに苛められて喜んでたんだね? つわあ……」

軽蔑の視線をダブルで浴びせる。

「違うー今は違うからー。」

「…………」

「…………」

「そんな田で見ないでくれー!」

「興奮するのか?」

「しないよーって伊藤も本気で引かないでよー。」

「だつてえ……。MでB」って……」

「勝手にJB」追加しないでよー。」

「恵、いじめても喜ばすだかだぞ」

「わーここよー帰るー今口は帰るからー。」

やつ言つてホントに帰るつとする悟。
さすがにちよつとやつすぎたかな?

「悟ーちよつと待てー。」

「……」

語は無言で振り返る。

やはりやつすぎたのか、若干涙が浮かんでいる。

俺はそんな語はして言った。

「悪い。帰るならクレープ代だけ置いてってくれないか？」

たつぱり三秒後。

「むづやだああああああ！」

悟は猛ダッシュで帰つて行つた。

「さて、クレープ食いにいくかー」

「功くん、鬼だねえ」

そんな悟の弦を背に受けつつ、教室を出るのだった。

「トイヘン」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

ショーストーリーは何も考えずに書けるので投稿頻度は高くなっています。

ただ内容はびりでもこことしか書いてないです。

「トマト」

悟「どうしてたの？」

功「ちよつとな

悟「トイレでしょ」

功「なんで知ってる？ストーカーか？」

悟「なんで真っ先にその疑いを持つかな！？」

功「いやだつて、なあ？」

悟「その「しようがないじやん？」みたいな顔やめろー。シヤツが
出てたからわかっただけだよ！」

功「あーホントだ。気付かなかつたわ」

悟「しまわないと怒られるよ

功「そうだな。ところでなんでうちの学園つてウォシュレットがあ
るといふことないといふがあるんだ？」

悟「確かに一階のトイレにはほとんどないね

功「職員室前のトイレはあるよな。あれは羨ましい」

悟「僕はウォシュレット使わないから別にいいかな」

功「なんで使わないんだよー!？」

悟「なんで怒ってるかわからないけど、あれってくすぐったいから好きじゃないんだよね」

功「いやむしろ気持ちいこだろ」

悟「いやいやお尻に水を直接かけられて気持ちいとか考えられないよ」

功「そりゃって改めて言わると変態っぽいけどな、あれはやっぱり気持ちいこよ」

悟「見解の相違があるみたいだね?」

功「俺は譲れない。お尻がきれいになつて気持ちいこなんて一石二鳥だろ!」

悟「あれは気持ち良くないねーへすぐつたくて我慢できなこよー」

恵「…」

功「恵!いいじにいたーちょっと聞きたい」とが

恵「男の子一人で…お、お尻が気持ちいとか我慢できないとか…やつぱつわつこいつ関係なの?」

悟「ちちがつぶよー」

功「どもるなー信憑性が薄まるだろーあと恵やつぱつてなんだよ
!?
」

「トマト」（後書き）

自分でも何書こうんだろ? うと想います。

「**御用語**」（**禮儀用語**）

閲覧ありがとうござります。

功「すい」と話してもいいか?」

恵「いいよー」

悟「いいけど、なんか漠然としてるね?」

功「聞けばわかる」

悟「なーい。けど。で、どんな話なの?」

功「ああ。これは前に元に電話がかかってきたときの「ひとなんだ
が」

以下回想（電話相手はA表記）

功「もしもし大藤ですけど」

A「いらっしゃい〇〇会社のAと申します。お父様かお母様はいらっしゃ
いますでしょうか?」

功「すみません。どちらもいないので自分が用件を伝えておきま
しょうか?」

A「ありがとうございます。それではメモなどを用意していただい
てもいいでしょうか?」

功「わかりました。ちょっと待つてください。」

A「はい」

功「メモは～つと。あつあつた。もしもし？」

A「……」

功「あれ？もしもし？ん？電話越しに何か聞こえるな」

A「……だから私じゃないんですつてーそれと今電話中なんですよ
つと待つてくださいー」

？「……お前以外に誰がいるんだ！だいたい上司との話途中に電話
なんかしてるなー！」

A「……お客様への電話なんですから待つてくださいー」

？「……ちょっと電話かせー！」

A「……つあちゅうどーー」

？「申し訳ありません。今忙しいので電話切らせていただきますーー」

功「え？あの…今そちらから電話かかってきたんですが用件だけでも

「

ガチャッ。ツーツーツーツー…

美香「あれ？おにーちゃん子機握つて何してんのー？」

功「いや、何もできなかつたんだよ…」

美香「へ？」

功「気にするな。それより何か用か？」

美香「うんー。今日もお兄ちゃんとお風呂入りつて思つて…」

功「いつも一緒に入つてゐみたいに言つても駄目だからな…」

美香「ちえー。じゃあ早くキスして？」

功「どうこう」とー？じゃあの意味が全くわからない…」

美香「兄は妹にキスしなきゃいけないんだよー？」

功「そんな決まりは絶対ない！全く、『冗談もほじほじ』しろよ？」

美香「はーい。まあ、私たちいつも寝てゐる間にキスしてゐるもんね？」

功「それは夢でつてことか？それとも俺が寝てゐる間にキスしてゐるもんか…？つてか冗談だよなー…？」

美香「キスしてくれたら教えるー！」

功「本末転倒じゃねえか！」

以上回想終了

功「つてことがあってな」

恵「たしかにすうじねー」

悟「うん。そんなことがあつたんだ…」

功「さすがにびっくりしたよ」

恵「私もー。まさかねえー」

悟「ああ、まさかなあ…」

恵&悟「功（くん）がそんなにシスコンだつたなんて…」

功「そつちー？電話の話がメインなんだけどーしかもシスコンじゃないしー。」

恵「いやあ電話の話も驚くけどさ、仲良いのは知つてたけど兄妹ですごいことしてるんだなーと思つてさー」

悟「インパクトが強すぎて電話の話が大したことじゃなく思えるな」

功「そんなにか？美香がいつもあんな感じってことは知つてるだろ？」

恵「キスまで進んでるってことは知らなかつたなー」

功「それは美香の冗談だつて！…………多分」

悟「うちの妹じや 天地がひっくりかえつてもあり得ないよ。ただで
さえ会話があんまりないのに」

功「それはお前が奈央ちゃんに嫌われているだけだ！」

悟「うひ。 やんな直接言わなくても…」

惠「黒川が奈央ちゃんに嫌われてるのは周知の事実でしょー？」

悟「ひどこや…」

惠「功くんもシステムのはわかるけどもつ少し節度を持つて生活
しなきや！」

功「違ひつてんだろー。ひつ考えてもおかしいのは美香だらつー。
？」

惠「けど時々断りきれなくて一緒に寝てるんでしょー？」

功「それは…つてなんで知つてんだよー？」

惠「美香ちゃんが言つてたよー」

功「あいつが俺のシステム疑惑の原因か！」

悟「疑惑じゃなくて事実でしょー」

惠「妹に好かれてる分他人から嫌われてよー」

功「妬むなー嫌に決まつてんだろー！」

恵「結論ー功はパソコン、黒川は妹に嫌われている兄略して嫌兄ー！」

功&悟「勝手にしめるなー！」

「電話」（後書き）

電話の話は作者の体験談だつたりします。

#3 いつもの風景 3 (前書き)

閲覧ありがとうございます。
全然進まないです。

「こつものとくわでいいか？」

「いいよー。あそこ」のクレープおいしいからー。」

悟が走り去った後、恵と一人でクレープ屋に向かつていた。学園から少し歩いたところにある公園に女性に人気のクレープ屋があり、そこに向かつている途中だ。

声のほうに顔を向けると、結構遠くに中等部の制服を着た女の子三人組がいた。そのうちの一人が凄い大きな声で叫びながらこっちに走ってきていた。

残りも一人も続いて走ってきた。

「ちょ、待つてよ美香！ほら、奈央も行くよ！」

「美香ちゃんも香奈ちゃんも走るの早いよ~」

別に走つてこなくていいのになあと恵に苦笑すると、

仕方ないよーと同じく苦笑している。

仕方ないってなんでだ？

恵に聞いてもはぐらかされ結局わからずじまいだつたので釈然としないが、考えてもわからなかつた。

それにしてもこの二人組はいつも一緒にいる。

仲良して微笑ましいと思つてはいるが、先頭を突き走らしてはいた我が妹、美香が勢いを殺さず、突進してきている。

「お、おい美香ー。そろそろ速度落とせつてー。」

「頭大丈夫か！？」

わけのわからないことを叫びながらもいまだ止まらない妹。
そして目の前まで来たかと思つと

「妹ダーアイブ！」

言葉通りにダイブしてきた！？

「なんの！兄キャラーツチ！」

避けると怪我をするかもしないと思い、キャッチを選択した。しかし、つられて俺もまでテンションがおかしなことになっている。

「さあ こいー絶対受け止めグフツー……やる……ぞ……」

「お兄ちゃんありがとーーさすがお兄ちゃんだね！」

俺に抱きついて『満悦な美香。

妹に抱きつかれてぐつたりしている俺。

実に対照的である。

「功くん！？大丈夫！？」

「やつと追い付いた！もつ美香急にって功先輩！？」

「功さん！？大丈夫ですか！？」

「つふふ…。ふふふふふふ…」

「こわつ！功くんめちゃくちゃ怖いよ…」

恵が何か恐ろしいものでも見たかのよつた反応をする。うふふ。一体何に怯えているのかしら？

思考がなぜかオネエになりかけていたが、泣きそうなほど、とか既に半泣きになっている奈央ちゃんが目に入り一気に覚醒した。

「はつ…！瞬意識がとんでた気がする…。そして腹がめちゃくちゃ痛いんだが…」

「功先輩大丈夫！？さつき急に不気味な笑いを漏らしてたけど」

「ああ、よく覚えてないけど腹以外大丈夫みたいだな。心配してくれてありがとう香奈ちゃん」

「そりや心配もしますよ。ホントにぐつたりしてたし。…それに功

先輩のことだし

「え？」

「なななんでもない！」

急に慌てる香奈ちゃんだが、俺にはさつぱり理由がわからなかつた。そして先ほど半泣きしそうになつていて、そしていま今は泣いている奈央ちゃんに顔を向ける。

「奈央ちゃん、泣かないで」

「だつて、ひくつ、功さんが…」

「奈央ちゃんは優しいなあ」

「まだに抱きつこうる美香を引つペがし、奈央ちゃんを抱きよせゐ。騒ぐ妹は無視する。

ちなみにこんな大胆とも思える「」とをするのは奈央ちゃんは美香ともよく一緒にいるせいか妹の様に思えてならないからである。

「ひく…」

「ありがと。けど、奈央ちゃんが泣いてると俺も悲しいよ」

「功さん…。無事でよかったです」

「奈央ちゃん…」

「功さん…」

「（反応が私たちと全然違う……）」

恵と香奈ちゃんが不機嫌そうな視線を向けてきてるが、今は気にならない。

てくれる。
なんて良い子なんだろうか！

「ちよつとちよつとお兄ちゃん！なにしてんのー？」

まだ騒ぐ妹。

「兄が抱き寄せていいのは妹だけなんだよ！」

「はいはい。奈央ちゃんホントにありがとう！」

「おおなりつ！？兄は妹を無視しちゃいけないんだよ！」

奈央ちゃんをそっと離すと、少し名残惜しそうな顔をする。
なんてかわいい子なのだろうか！

「こんなに良い子でかわいいのになんで…」

功さん：恥ずかしいです / /

「なんで悟の妹なんだ！」

そう、奈央ちゃんは悟の妹。

間違つ」となく悟の妹。黒川奈央。

「なんで俺の妹じゃないんだ！」

「お兄ちゃんー…さすがにそれは冗談でも傷つくな…」

「大丈夫だ美香。もちろんお前が」

「お兄ちゃんーー」

「一番田に良い妹だぞー！」

「一番田は誰…？美香、ちょっとオハナシシテクルヨ…？」

最後が片言になり、不気味な雰囲気が美香のまわりに漂い始める。

「功くん、それわりまづくない？なんか怖いんだけど…」

「美香が人間じゃなくなる前になんとかしてくださいー！」

「（「ククククシ…）」

確かに口からおよれ呼吸とも思えないような変な音が聞こえてくる。
さすがに冗談が過ぎたか？

「冗談だ、一番は美香に決まってるだろ？」

「本当ーお兄ちゃん」

「多分」

「ホントウ? オーライちゃん」

「本當だ、天地神明に誓つてもこい」

「私もだよお兄ちゃん!」

「ふつ、一瞬寒気がしたぜ。」

「変な冗談なんか言わなきやいにのに!」

「悪いな。これはもう癖みたいなものだ」

「まあ私は功くんのノリがいいところ好きだけだ!」

「俺も恵と話したりするのは好きだな」

本心から思つていいことなので、少し恥ずかしかつたが素直に口に出せた。

しかし似たようなことを言つた恵は顔を真つ赤にして恥ずかしがつている。

「な、なんか恥ずかしくなつてきたな」

「や、そうだね!」

「「「……」」」

中等部の三人からジト目で睨まれる。

もの凄く居心地が悪くなってきた。

「さて、クレープ食いに行くか恵！」

「そうだね功くん！」

大げさにテンションを高くして誤魔化すしかできなかつた俺たちだ
つた。

#3 いつも風景 3 (後書き)

本当に進まないです。

「好き嫌い」（前書き）

自分は鮪が嫌いです。

「好き嫌い」

功「あー田覚めるわー」

恵「まーたブラックコーヒー飲んでるの?」

美香「お兄ちゃん好きだねー」

功「飲むとスッキリするんだよな」

恵「苦いのにスッキリするかな?」

功「それは慣れの問題じゃないか?」

恵「私はこつまで経つても飲める気がしないよー」

功「恵ちゃんはお子ちゃまですもんねー?」

恵「私はこつまで経つても飲める気がしないよー」

功「いろんなもの飲めても飲めなくとも変わんないから気がしなくていいよー。」

美香「お兄ちゃん弱つー。」

功「殺されそうなほどのフレッシュヤーを感じたんだからしうがないだろ?」

恵「やうなの? (一一口) 」

功「自分の間違いに気づいたんだよ」

美香「お兄ちゃん…」

恵「ほらー馬鹿な」としてるからわがの美香ちゃんも失望して

美香「弱いお兄ちゃんも良いねーーー」

恵「なかつた?ーーー」

功「嫌われないのは良いんだけど、素直に喜べないんだよな…」

恵「喜んでたらズン引きだよ…」

美香「なんですよーーー妹に褒められた兄は喜ばない」といけないんだよ
?」

功「あれは褒められたのか?」

恵「美香ちゃんの兄の定義がすげー变成になるよ…」

美香「別に普通だと思ひけど」

恵「それはないよー」

功「ああ、ないな」

美香「聞く前に否定しないでよーーー」

恵「じゃあたとえばなにがある?」

美香「兄は妹に隠しじ」とをしてはならない

功「俺のプライバシーはどこにある?」

美香「大丈夫だよーお兄ちゃんの」とは何でも知ってるからー

功「すでにはないのか?..」

恵「まあさすがにそれはないと思つたけど、じゃあ功くんの食べ物の
好き嫌いは?」

美香「好きなのはチーズだよ。特に裂けれるチーズを裂かないで食
べるのが好きなんだよね」

功「.....」

美香「それで嫌いなものはリンクときのことウーで、他にもあるけ
ど特にこの3個は苦手みたい。リンクは気がついたら嫌いになつて
たけどリンクゴジューースは飲めるつて変だよね?きのこは味が徹底的
に嫌いで、ウーは前プリンに醤油をかけたような味つて聞いてから
苦手になつたんだよー」

恵「...すごい詳しいけどあつてるの?」

功「...全部あつてる。しかも教えたことない」とまで知つてゐるーー

美香「言つたじやんーお兄ちゃんのことならなんでも知つてゐるつ
ーー!」

恵「冗談じゃなかつたんだね…」

功「冗談であつてほしかつた…」

恵「それにしてもねえー」

功「恵からもちよつと壇つてやつてくれよ」

恵「裂けれるチーズは裂きなよ?」

功「それはほつとけよ…」

「好き嫌い」（後書き）

ツナ缶は好きなんですが。

「あこつえお作文」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

年明けに中古店でWii+過去発売済みのWii専用ソフト全てが入った福袋があると友人に聞きました。値段は99万円だそうです。

「あこつれお作文」

恵「あやつー地震ー?」

功「結構でかいなー」

悟「まだ揺れてるよー」

恵「…おわせたかな? びっくりしたー」

悟「携帯の速報で今の震度4だつて書いてあるよー」

功「今ので震度4か。もし震度30とかだつたらどうのへりこられるんだ?」

悟「それは地球滅亡レベルだよー」

功「けど実際もつと強い揺れが来たら相当荒てるだろ? なー」

恵「そりだよねー。」「おすし」とか気にしつける余裕ないよねー

悟「おすし?」

功「おそれなー すばやく しづかにひやつだなー」

功「ああー僕が知つてるのは「おかし」だったからわからなかつた

「よ

功「結構いろいろなのがあるみたいだからな。けど意味はだいたい一緒だろ」「

恵「そういうのつてあいつえお作文つていうんだよねー」

功「よく自分の名前で作ったりするよな

恵「そう? 私はやったことないなー」

悟「僕もないね

功「マジでー? 一度は通る道じゃないのか?ー」

悟「そんな大げさに驚かなくとも……」

恵「じゃあやつ功くんは作ったことあるんだ?」

功「何回がある?」

恵「どんなのどんなのー?」

功「『』『』『』それが『』『』『』運命

悟「無駄にかっこいいー!」

功「『』『』恋と『』『』裏切り

恵「なんか毎日ラのテーマみたいだねー」

功「」んな感じだな。一文字だから作りやすいんだよ」

悟「なんか想像してたのと違つたよ……」

惠「三文字だと難しいかなー？」

功「いや、すぐ作れるんじゃないか？」

恵「ホントー? じゃあ私の名前で作つてみて!」

功一『あめかずかべくひりみ耳の中』

功「じゃあもつといこのを」

「普通のお願いね？」

功め女神がぐみ具現化したみたい

恵「それは大げさすぎでしょ！？」

功 — 最初のよりはいいだろ? —

恵・それはそこだけど…普通は恥ずかしいよー」「

功「じゃあ次は

恵「ちょっと待って！次は黒川に作ってあげてよ！」

悟「え、つ？僕はいいよ！」

惠「遠慮しないで作つてもいいなよ。」

悟「絶対に中傷するような内容だから嫌だ！」

功「大丈夫だ。今回まじめに作るから！」

悟一本当かなあ……。ついでいうがなんでそんなにやる奴なの?」

功一なんか楽しくなってきただけだから気にすんな

「おお、功ぐんは器ぐよく分かんないと」でやるやうだすよれー

書類はあんまり出さないのでこれ

卷之三

惠·文公之子也。」

功『『や』』昨晩『と』トイレで『る』ルールルル

悟「中傷はされてないけどイメージは最悪だよーーー」

惠「うわあー！」

悟、伊藤も引かないでよ！功が勝手にいってるだけだよ？！」

功「不満か？」

悟「満足するはずないでしょー。」

功「しようがないな。じゃあもう一個考えてやるよ。まつたぐ…」

悟「え？ なんで僕が譲歩されたみたいになつてるので…」

功「できただぐ！」

悟「はやつー！ 絶対うくなのじゃないでしょー。」

功「『や』 最近 『と』 父さんと 『る』 ルールルルー！」

悟「やひぱつー…しかもわざわざよつもひびこじやん…。」

恵「…………」

功「家族の在り方つていろいろあるんだなあ」

悟「そんな田で見ないでー僕も父さんも至つて健全だからー。」

悟「そうかもしないけど僕の家は違つよーってか元凶がなに言つてゐるのやー。」

功「なんだよ？ まだ不満か？」

悟「むしろやひぱつも不満が増えたよー。」

功「しようがないなあ。じゃあもう一個だけ」

「...アーティスト...アーティスト...」

「あいつ&お作文」（後書き）

定価を考えれば安いですが、99万円は高いですよね。
安いのに高いっていうのもおかしいですが。

#4 こつもの風景 4 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

三連休だといふことを今日知りました。

結局五人でクレープ屋に向かうことになつた。

中等部の三人と背が小さい同級生一人で。

見ようによつては年下を侍らせてるように見えるんじやなかろうか

…。

「…」

何気なく少しだけ歩く速度を遅め、四人が前に行くよつて調節する。ちょっと被害妄想がすぎるかも知れないかとも思ったが、どこで誰に見られてるかわからないからな！

「お兄ちゃん？どうして後ろ行くの？」

「功くんはまわりの目が気になるんだよー」

「男の人は功先輩だけだもんね」

「しかも年下の子ばっかだからねー。ロリコンに見えるかもねー」

「…」

一瞬で、しかも完璧にばれていた。恵たちの洞察力に戦慄する。

「やつこえば今日はつちの兄は一緒にないんですか？」

と、奈央ちゃんが今さらな質問をしてきた。

ちなみに、この中で兄がいるのは美香と奈央ちゃんの二人のみ。香奈ちゃんには姉が一人いる。

美香は俺のことをお兄ちゃんと呼び、奈央ちゃんは悟の「J」とを……えつと、なんて呼んでたかな？

俺たちの前では「うちの兄」とかだが、よくよく考えてみれば悟と奈央ちゃんが話しているのはあんまり見た覚えがない。

「ホントにかわいそうだな。

「功さん? どうかしましたか?」

「ん? ちょっと哀れな友人にメールを送つてたんだ」

「?」

「それより最初に戻るけど悟は今日は帰つたよ」

「珍しいね! お兄ちゃんと悟さんつてよく一緒にいるのに」

「ああ、ちょっと色々あつてな」

「せつだねー」

俺が苦笑するのに合わせて、悟も苦笑する。

「恵がドリーブりを発揮してな。悟におまえは だ! とか、B! だ! とか罵つてたら帰つてつた」

「ちよちよちよつと! 真実がねじ曲がつてるんだけど! ...?」

「恵先輩ってどうだったの！？人は見かけによらないってホントだつたんだ…」

「香奈ちゃん信じてるの…？っていうか声でかいよ…」

「お兄ちゃんをMにはさせないからね恵ちゃん…」

「だから違うつてば…！功くん誤解といつよー」

「はつはつはつはぶつ…！…！」

「功くん 誤解といつくれるよ…？」

高みの見物をしているかの、Jとく笑つていたら横腹に強烈なパンチが飛んできた！

今日は腹に強打が入りすぎな気がする。パンチを打つてきたほうを見ると、笑顔でこちらを見つめている恵さん。

怒ると笑顔になる恵だが、これが結構怖かつたりする。

普通に怒られるより、笑顔で怒られるほうが怖いことつてあるよね？

「すいませんでした女王様…。はつ！迫力につられて思わず言つてしま、「フツ！…！」

「ふふふ。功くんも懲りないねえー」

「はい…。すいませんでした…」

「まつたくーもうやめてよね」

二人とも「冗談でやっている」とはわかりきっていたので、あっさり許してくれる。

その一方で…

「「「ドウ女王様…」」」

三人組は若干ビビっていた。

#4 こつもの風景 4 (後書き)

短めでいいません。

もつとキャラ数を減らせばよかったですかなと後悔します。

「差」（差額）

閲覧ありがとうございます。

「差」

功「へー。それでどうなんだ?」

悟「えつと最後は」

功「あ、あれ奈央ちゃんじゃないか?」

悟「え?ホントだ」

功「よく本屋で会つけどよっぽど本が好きなんだなー」

悟「本屋で会つたことあつたんだ?」

功「ああ。奈央ちゃんから聞いてないのか?」

悟「…奈央とはあまり会話がないからね…」

功「それは悪いことを聞いたな…」

悟「いや、大丈夫だよ…。慣れてるから…」

功「それにしても奈央ちゃん良い子なのになんで悟は嫌われてるんだ?」

悟「それは僕が聞きたいくらいだよ」

功「今度聞いてみるか」

悟「やめてーそんな残酷な」とはー」

奈央「…ん？あ、功さんー」

功「こんにちは奈央ちゃん」

奈央「こんにちはー功さんも何か本探ししているんですか？」

功「いや、今日は話に付き合つてここまで来たんだ」

悟「よ、よつ

奈央「また漫画買いに来たの…？」

悟「え、まあそつだけど…」

奈央「たまには小説とか読まないの？こつまで経つても漫画ばっかりだし」

悟「僕も小説くらじ読むよ。ラノベだけビ

奈央「…」

悟「別にいいじゃないかー功だつて漫画もラノベも読むよなー？」

功「まあ悟ほらじがないけどー応な

奈央「そつなんですか？今度功さんのお勧め教えてください

悟「僕とは天地の差がある反応だねー？」

奈央「功さんは一般小説も読むからいいんです」

功「じゃあ何か考えておくよ」

奈央「ありがと」

功「そういうえばこの間奈央ちゃんに借りた本す」「よかつたよ」

奈央「良かった！あれ私もす」「感動したから誰かに紹介したかつたんです！」

功「それでなんだけど、美香も読みたって言つから貸しちゃつたんだけ大丈夫かな？」

奈央「美香ちゃんなら全然大丈夫ですよ」

功「ありがと。奈央ちゃんはやつぱり優しいね」

奈央「そそそんなことないですよー」

悟「そうだね。僕には優しくないからね」

功「そうか？照れてるだけだろ？」

悟「そうだったらどれだけいい」とか…

奈央「あ！そういうえば功さんの好きな探偵シリーズの最新刊買いましたか？」

功「もう出たのか…」

奈央「あっちのパートナーにありましたよ?」

功「ちょっと見てきていいかな…?」

奈央「わ、私も一緒にいいですか?」

功「もちろん。教えてくれてありがとうございます」

悟「あの、僕はどう」

功「あ、悟は自由に見てきていいぞ」

悟「あ、そう?」

功「ああ。じゃ」

悟「…」

T「おっ、黒川ちゃん。なにボケつとしてんだ?」

悟「ちょっと仲間外れにされてね…」

S「なるほど。また大藤と伊藤か?」

悟「いや、功と妹にね…」

T 「黒川の妹つて確かに中等部だつけ？」

S 「俺大藤がす」く良い子だつて言つてたの聞いたぜ？」

T 「それは俺も聞いたことあるな」

悟「功にとつては良い子なのかもね…」

T 「どういってんだ？」

悟「僕は嫌われてるみたいでさ。なんかもう功が本当の兄みたいに感じinぐらじだよ。ははつ」

S 「自嘲するなよ。さすがに思いつめすぎだつて！」

悟「あれを見てもそんなことが言えるかな…？」

T 「…すいじに仲良さそつだな」

S 「…確かに大藤が兄に見える」

悟「なんでこんなに差があるんだらうへ…」

T 「すまない…。全くわからん」

S 「それにしても、黒川は妹にまで」

悟「それ以上言わないでーきつと精神が耐えられないからー」

S「あ、ああ。すまない」

T「え、えうだー。今日は俺たちと一緒に遊ぶかー？」

S「それがいいなー。黒川がいれぱれっと楽しけりだがー。」

T「あ、あつがどつ…。嬉しこみ…」

T「じゃあこくかー」

」の日以来、TとSはとても優しくなったといふ。

「差」（後書き）

オチをどうつけるか考えてたら、終わってしまいました。
やつぱり先に考えておかないと駄目ですね。
この回は忘れてもらつても構わないです。

「パンシ」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

「パンジ」

功「男子って小さい頃はブリーフ履いてたよな?」

悟「僕はそうだったね」

功「俺も10オケらいまではブリーフ履いてたな」

恵「……」

悟「けどだんだん柄パン派が増えてきて、ブリーフが途端に恥ずかしくなってくるんだよね」

功「そうそう。『え、お前まだブリーフ履いてるの(笑)』みたいに言われるんだよな」

悟「今にしてみれば大したことじゃないけど、その当時はそれが言われるのが嫌だったなあ」

功「それで、気が付いてみれば皆柄パンを履いてたみたいね」

悟「ちなみに僕は今でも柄パン履いてるよ。楽なんだよね」

功「ブリーフはなんか窮屈だよな?その点柄パンは解放感があると
いうか」

恵「……」

悟「功はどうなの?」

功「俺はいまはボクサーパンツだ」

悟「そうだったんだ。僕は履いたことないけどあれも窮屈そうに見える」

功「いやいや。伸縮性があるからそれは大丈夫だ。しかもかなり動きやすい」

悟「へー今度試してみようかな」

功「それがいい。ボクサーパンツはお勧めできるぞ」

恵「……」

悟「けどブリーフって大人になつてまた履いてるイメージがあるんだよね」

功「それはわかるな。父親つてブリーフ履いてる感じがする」

悟「実際うちの父さんもブリーフだしね」

功「その原点にかえる理由はなんなんだろうか?」

悟「うーん。わかんないけど僕たちもいつかまたブリーフを履くことがあるかもね」

功「そうだな。まあまだ先のことだけは思ひけどな」

悟「で、ボクサーパンツはどこで買つたらいいかな?」

功「どこのでもいいんじゃないかな?俺もメーカーにこだわってるわけじゃないし」

悟「そつか。じゃあ駅前のあそこで買おうかな」

功「ああ、俺もそこで買つたよ」

惠「…………あのー。すみじく話に入りづらいんだけど……」

功「あーすまん。なんか盛り上がりやつて」

悟「そうだね。じめんじめん」

惠「まあいいけどー。私も話こじれてよー」

功「わかつたよ。じゃあ恵は今どんなパンツ履いてるんだ?」

惠「それはセクハラだよー?もつと違う話に入れてーーー」

功「じゃあ恵はどこでパンツ買つてるんだ?」

惠「それもセクハラ!ーーーパンツから離れた話題にしてよーーー」

功「いやだって話に入りたって言つからパンツについて話したいのかと」

惠「違うよーーーパンツはもついいかいーーー」

功「じゃあグラジャーにひこて

恵「もうセクハラしたいだけでしょ！？しかもそれについて話せるの私だけだし！..！」

功「悟も話せるだ？前つけてたもんな？」

悟「そんなわけないでしょ！？完全に変態じやん！つていうか僕をオチに使わないでよ！」

功「このままだと俺がセクハラばっかしてるみたいになると思ってな」

悟「保身のために友達を売ったの！？」

功「自分の身は自分で守らないとな」

悟「最低だ！..！」

恵「二人で言い争つてるけど、一番の被害者は私だよな..？」

「パンツ」（後書き）

10分で書けました。
それがなぜか空しいです。

#5 こつもの風景 5 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

すっかり忘れていて七草粥を今日食べました。

所変わつて現在、マイホーム。

大藤家である。

夕食後、居間でテレビを見ながら家族が集まつてゐるこつもの光景があつた。

しかし今日は疲れたなー

結局あのあと、恵にクレープを奢つ（三個）せつかくだからと美香、香奈ちゃん、奈央ちゃんにも一個ずつ奢つた。ベ、べつに見榮張つたわけじゃないぞー！

「お兄ちゃんは誰に奢つてゐるの？」

「心を読むのはやめや」

ちなみに、クレープ屋まで行くのには学園からゆっくり歩いても15分もかからない。

はずなんだけど、今日は学園を出てから1時間以上もかかっていた。まつたく、悟や恵、美香はすぐふざけるからどうしようもないな。

「お兄ちゃん、自分の事は棚にあげるんだね」

「妹よ、なぜ兄の考へてることがわかる？」

さつきはスルーしたが、ここらではつきつせとかないとな！

プライバシーは皆に平等にあるべきだ！

「え？ だつて兄妹だし当然でしょ？」

だつて兄妹だし当然でしょ？

……根拠になつてなくない？

「…仮にその説明が正しかつたとしよ。しかしそれすると俺たちは兄妹じやなくなるんだが」

「そんなことないよーだつてお兄ちゃんも私の考へてぬ」とわかるでしょ？」

「「」めん。全然わからぬ」

そして、あんまりわかりたくない。

「まじで？！それでも兄なの？」

「…なんで俺がそんな常識外れの人を見るよつた目で見られてるんだ？」

「けどお兄ちゃんが義兄かあ…。それもいいなあ

この妹は底が知れないな。

兄としては不安でしようがない。

自分の身も不安でしようがない。

俺、きれいなままで婿に行けるんだろうか…？

「功ちゃん、あんまり心配しなくても大丈夫よ？」

「母さんにも心読まれている…？」

「楽しそうだからやってみたわ」

「そんな軽いノリで？！」

誰でもできるの？！

まさかホントに俺が常識外れなのか？

「美香ちゃんはお兄ちゃんが大好きなだけなんだから。むしろ喜んでいいんじゃないかしら？」

「それはそうだけど……」

「他の『』家庭ではあんまりないことじっこわよ？」

「それは身近に例がいるからな……」

確かに喜んでいいのかもしれない。

いや、実際嬉しいと思ひ気持ちがないわけじゃない。

「ただなあ……。愛が重いんだよな……」

これって恋人に言つセリフじゃないか？

しかもあまり普通じゃない恋人に。

「あらあら。まるで恋人みたいこというのね？」

「う、う……」

思つていたことを母さんにすばり言われてしまった。
あれ？でも今は心を読まれてなかつたみたいな言い方だつたな……

つてことはさつきのはホントにノリだけでやつてたのか！？
我が母親ながら恐ろしいな…

「兄妹はもはや恋人と同じだよお母さん！」

「美香ちゃんは将来お兄ちゃんのお嫁さんかしらねえ？」

「そうだよ！」

「…これ、中2の娘とその母親の会話だって信じられるか？」

「あの、兄妹って結婚できないって知ってるか？」

「お兄ちゃん法律なんて信じてるの？」

「あれは信じる信じないってもんじやないから…」

都市伝説みたいな扱いすんなよ！

「それより美香ちゃん、お風呂沸いたから入つてきたら！」

「はーいー覗くなー10分後がお勧めだよ、お兄ちゃん

「10分後に何があるのか！？」

「来たらわかるよー」

「ちょっと気になるな…
いや、覗かないよ？」

「……」

「……」

一人騒がしい妹がいなくなり途端に静かになる居間。

今、大藤家は3人家族で父親は俺が4歳の頃に病死した。その頃は3歳違いの美香はまだ1歳だったからあまり覚えてないだろうけど、母さんがひどく憔悴していたのを覚えている。それが嫌である頃は母さんに元気を出してほshくていろいろしたつけなあ……

「うふふ。ホントにあの頃から功ぢやんは優しくて、お母さんはずつと頼りにしてるのよ?」

「母さん……」

「いこ話なのにせつげなくまた心読まれてるな……。

「だから美香ちやんの」とも安心して任せられるのよ

「それは兄としてどうのかな?」

「もちろんお嬢さんとしてでもいいのよ?」

「兄としてまかされます」

うふふ。と笑い[冗談を言つ]母さんだが、急に真面目な、それでいて少し申し訳なさそうな顔で言つた。

「それと……父親としても」

「…」

「「」みんなさい。本当なら美香と3歳しか変わらないあなたに頼む」とじゃないんだけれど」

「謝る」とじゃないよ。それに昔から母さんには頼られるのは好きなんだ」

「ありがとう功ちゃん。美香にあなたがいてくれれば何も心配ないわ」

「それは過大評価が過ぎるよ」

さすがに照れくさくなつて、そのままを向きながらハハ笑顔である。

「あらあら、照れなくてもいいのよパパ」

「お願いだから外では呼ばないでくれよ?」

「ついでだから私の夫にもなつてもらおうかしら?..」

「それはついでで済ませれるレベルじゃないー」

「だって母と息子だぜー!」

仰天していたら、風呂上がりの美香が小走りで居間に戻ってきた。

「お風呂上がったよー。次はお兄ちゃんが入つてねー私の次にー!」

「なんでそんなに強調するんだよ…」

入りにくこじやねえか！

「あいあい、『猛烈なダーリン』

「ダーリンって何ー？」

二つの間にか夫にされてるー？

「お母さんー？」「へいお母さんでもお兄ちゃんは渡さないよー。」

「あいあい、美香ちゃんはお兄ちゃんはまだ早いこと黙つわ

俺、対象年齢とか決められてるんだらつか？

「やんな」となによーお兄ちゃんの扱いなら絶対負けないもんー。」

「それなりのお母さんも負けないわよー。」

「風呂、入ってやめや…」

もつ元全に物扱いになつておじやんと思にながひ、これ以上巻き込まれる前に退散する。

しかし、毎回のことで疲れはあるが、あれはあれで一つの家族の形なんだと思つてどうしても嫌とは思えなかつた。

深夜、寝る前にじりじりしても確認したいことがあり美里に電話した。

美里はいわゆる幼馴染で、香奈ちゃんの姉である。

悟に電話しようとも思つたが、そりいえば今日は泣いて帰つたことを思つて出したりやめた。

めんどくせたからな。
程なくして電話が通じた。

「もしもし美里か？」

『やうだけど、こんな時間に珍しいわね』

「ちよつと聞きたい」とあつてな

『やういえば私も言いたい』とがあつたんだつた

「やうなのか。じゃあ美里からでいいぞ」

『やう？まあ今日香奈にクレープ買つてくれたみたいだからそのお礼をね』

「そんなの全然気にしなくていいの？」

『恵と美香ちゃんと奈央ちゃんにも奢つてあげたみたいね？ずいぶん優しいじゃない？』

「なんか言い方に棘がないか？」

『かわいい女の子の中でこそ嬉しかったでしょ？』

「お礼は？」

急に不機嫌になつたなー。気づいたら棘だらけだよー。

『まあいいわ。それで? あなたはビッシュたの?』

「ああ、さよっと確認したことがあるんだけどな」

『私で答へりねー』となり答へぬナビ』

「助かる」

『ナビのへりこいわよ。それで確認ひつ?』

「ああ。兄妹だと心を読み合へるつて本当か? 美里んといは姉妹だけじじつだ?」

『…なにか疲れる』とでもあつたの?』

とても優しい声で心配された。

おやらく脳の心配をたれてるらしこ。

「待てー誤解だー俺の脳は今田も正常運転してるー。」

『ホント? けじやんな非現実的なこと聞こだすなんてお脳がおかしくなつたのかと』

「お脳じつなーちゃんとした理由はある」

『ふーん。で、その理由とは?』

『美香と幽ちゃんが俺の看えてる』と読みとつてゐみたいなんだ』

俺は幼馴染に向ひ、「何を言ひたんだろ?」
もじ「こんなことカウンセラーに相談でもしてみつものなり確實に病院

を紹介されると思ひ。

『あーあの2人は特別よ。一般的な兄妹はそんなこと無理だから』

「あつわつ、四つんだな」

『まあ前から知ってる』ことだしね

…やつぱつうちの家族は変なんだな。

「やつが、けど常識が再確認できたよ。ありがとうございます」

『いいけど、それが聞きたかっただけ?』

「そうだ」

『ふ、ふーん。それだけなんだ

「ん?なんかあるのか?」

『別に?』

「別に?お前…」

『や、それじゃあおやすみー。』

「ああ、おやすみ」

何だつたんだ？

#5 こつもの風景 5 (後書き)

さうやく作品の中の一冊が終わりました。
難しさを実感しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1856ba/>

笑い日和。

2012年1月8日19時52分発行